＜先週の説教のつづき・特にアナニヤ＞

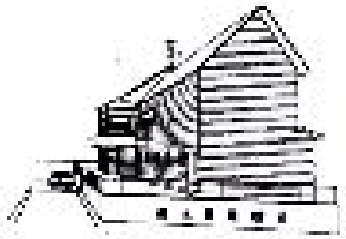
【バルナバ・その意味は慰めの子】今朝の“第一回伝道旅行の開始”の出来事の出来事（１３：１）のところでバルナバという名の人が出てきました。“クプロ（キプロス島）生れのレビ人で、使徒たちにバルナバ（「慰めの子」との意）と呼ばれていたヨセフは、自分の所有する畑を売り、その代金をもってきて、使徒たちの足もとに置いた。(4：36)”と紹介されています。そのころのキリスト教徒は、ユダヤ人の中で数を増して行きました。迫害する者たちの中でその数を増したのです（マタイ５：44)。

【信仰者の群れ】“彼らの中に乏しい者は、ひとりもいなかった。地所や家屋を持っている人たちは、それを売り、売った物の代金をもってきて、使徒たちの足もとに置いた。そしてそれぞれの必要に応じて、だれにでも分け与えられた。(4：34-35)”とあるように、素朴な共産主義的世界が一時実現していたことが分かります。彼らは働くこともまた惜しまず、その利益は全体のものになり、扶養を必要とする人にも分けられたということでしょう。ここにユダヤ人改宗者バルナバが現れます。彼は不動産を処分し、おそらくそのかなりの部分を“キリストを信じる人々の群れ”の為に差し出しました。この光景を外部からみたとしますと、魅力的な姿でもあり、ある人々にとっては、最後まで避けなければならないものだったに違いありません。彼は“キリストと信仰者の群れ（教会）”に依拠して、現実の世界で生きる道を選んだということになります。このバルナバがパウロの伝道旅行に同行することになります。

【アナニヤとサッピラ】5章にこの夫婦の物語が出てきます。考えてみましょう。彼らは教会を“共謀してごまかす相手（5：2）”と思っていたのです。しかし群れに憧れ、魅力だと思っていました。だから、資産を処分したことはしたのですが、その全部を教会の為に用いる（献金する）ことはしませんでした。よくないのは、バルナバと違い、ペテロの問いに対して“これで全額です”と言ったことです。5：4 に“売らずに残しておけば（また献金できたのに)、あなたのものであり、売ってしまっても、あなたの自由になったはずではないか”とあります。ペテロは（教会の清さ為に）ずいぶん辛い思いをして“悪しき思いに心が奪われている”とこのことを言います。ペテロは辛かったと思います。彼には神様が遣わしてくださった、三度鳴いて、彼を信仰の告白へと導いた鶏の思い出がこびりついていました。アナニヤのしたことは、そんなに悪いことでもありません。命令されてしたことでもありません。悪しき計略に心が奪われたことが問題なのです。そんな者の為に主の救いと恵みの聖餐があるのです。

週　報

２０１０年　７月　４日



伝えよう　救い主を
迎えよう　主の民を

日本フリーメソジスト
清水草薙キリスト教会

牧師　　村上　定幸

ユース礼拝	毎日曜日	午前　9：00
礼拝式	毎日曜日	午前 10：30
	（聖餐式　第一日曜日）	
夕礼拝式	毎日曜日	午後　7：00
エステルの会	毎水曜日	午前 10：30
聖書研究祈祷会	毎水曜日	午後　7：00

ホームページ　http://kusanagi.church.jp/

〒424-0885
静岡市清水区草薙杉道３丁目２－２６
☏054-345-4070　E-Mail grace@big.jp
振替口座　00890-6-214042